

巫女長阿鼻叫喚地獄編

……邪妖教団が本拠地と定める小倉市は、公的な地図からはその存在が抹消されているものの、いまだ一〇万人の市民が暮らしており、彼らは教団の奴隸として生死の自由さえ剥奪された常態での生活を余儀なくされていた。この状態を「この世の地獄」と表現する者もいるが、邪妖教団の幹部たちからすればその認識は生温く、真の「地獄」を知らないからこそその発言と言わざるを得ない。

邪妖教団の本部は市の中央に位置するピラミッド型の建物に置かれている。この建物は、地下一階、地上七階からなる建物で、最上階の部分は黒色の塗料で塗装され、どの方向にも「目」を模した模様が描かれていた。この建物は元々、小倉市に本社を置く地元密着型の商社の本社ビルであったのだが、邪妖教団が進出した頃を境に経営が悪化し、倒産。社長は自殺し、遺族は教団の信者にされた後、残されていた財産を根こそぎ奪われた。命だけは助かったものの、彼らはいまもなお小倉市にて強制労働に従事させられており、いわゆる「この世の地獄」というものを体験している。

しかし、本物の「この世の地獄」というものは、教団本部の地下部分にこそ存在する。

この場所はかつて、商社が所有していた頃は倉庫として活用されていたのだが、現在は改装され、妖魔たちを繁殖させるための「養殖場」として使用されている。仕切られた小さな個室はどれもおぞましい赤々とした肉壁で満たされており、吐き気を催す臭気が充満していた。そしてこの小さな個室には、邪妖教団によって捕らわれた女性たちが肉壁に手足を埋められる形で繋がれていた。彼女たちはこの場所で、おぞましい姿形をした妖魔や悪鬼たちに犯されて、望まぬ妊娠を強要されて、絶望に満ちた悲鳴を上げて泣き叫んでいた。

「いやあああああああああああッ、もういやあああああああああああッ！」

「ひいひいひいひいひいひいッ！　ぐえッ、げえッ、うごおおおおあああああッ！」

「殺して……：……お願いだから、もう……：……殺してえ……：……」

「うぎいひいひいひいひいッ！　う、動いてる、お腹の中で、お胎の中でッ、気持ち悪いのが動いてるのおおおおおおおおッッッ！」

「ぐええええええええええッ！　む、むりッ、そ、そんなの、入らない！　入らな——ぎやあああああああああああああああああああッ！」

「さ、裂けるう、裂けちゃううううッ、アソコが裂けちゃうよおおお
おおおおおおおおおおおおおおおッッ！」

「お母さん、助けてえ、助けてよお、お母さん……」

「いやあああああああああああああッッッ！ も、もう、これ以上
ッ、酷いことしないでえええええええええええええええええッッッ！」

「う、産まれる……ひひ、また産まれる……気持ち悪い赤ちゃんが、また
産まれるの……ひひ、ひひひ……」

「あへ、へへ……うへへ……もう、だめ……」
「こ……ろして……」

犯す。犯す。犯しまくる。妖魔たちが、悪鬼どもが、魑魅魍魎の群れたちが、
捕らわれた女たちを犯して犯して犯しまくる。女たちの嫌がる悲鳴を聞いて顔
を醜悪に歪めながら、己の生殖器で突いて突いて突きまくり、膣内に精を放つ
のだ。すえた異臭が充満し、その臭いに耐えかねた女性がゲゲエと嘔吐して
もお構いなしだ。女の反応が鈍くなり、全身から力が抜けて締め付ける力がな
くなっても関係ない。そこに穴があり、女が呼吸して脈があるならば、彼らは
容赦なく生殖器を突っ込み、激しく無慈悲に腰を振り続けた。

養殖場と定められたこの地下空間には、数百人を超える女性たちが繋がれて
おり、彼女たちはそこで、妖魔の数を増やすために、人外の化け物たちを相手

に望まぬ性行為を強要された挙句、望まない妊娠と出産を繰り返しおこなわされてきた。中には、身体を改造されて乳房での妊娠・出産が可能な身体にされた者、交配実験の材料とされた者、質の高い妖魔を産み出すため同化を強要された者、より強力な妖魔を生み出すために子宮を蟲毒の器として利用された者などもいて、この惨状と比較すれば、外での強制労働が天国と思えるほどであった。先の戦いで捕まった九条家の女性たちも、いずれこの場所に連れて来られ、死ぬまで繁殖用の母胎としてその子宮を活用されることになるだろう。しかし、その中でひとりだけ、身柄を地下ではなく地上へと送られた人物がいた。

九条玲奈である。

彼女は暗魔誠一から教団のナンバー二の地位にある蝦夷雄大に身柄を引き渡された後、入念な身体検査を受けた後、教団本部の最上階へと送られた。

教団の教祖・邪妖院妖一郎が待つ場所へと。

蝦夷雄大に連れられて、エレベーターに乗せられた玲奈の身柄は、衣服こそ着用が許されていたものの、全身を荒縄でギチギチに拘束されており、自殺防止用の猿轡を嵌められていて、その上、魔封じの呪札まで張りつけられていた。完全に自由を奪われた状態にあった。

「うう、ぐ………」

「動くな。じっとしていれば、これ以上の手荒な真似はしない。だが、少しでも抵抗すれば、その時は容赦せんぞ」

蝦夷の言葉に嘘偽りは無い。彼は妖蟲を操る力を持っているだけでなく、体内にも無数の妖蟲を飼っていて、いざとなれば指一本動かすことなく敵を殲滅するだけの力を所持しているのだ。ゆえに、もし玲奈が、この状態で、無謀で承知で抵抗したとしても、勝てる確率は限りなくゼロに等しかった。

それでも、玲奈はまだ諦めてはいなかった。

(おのれ……いまに、見ておるがいい……)

この先、たとえ何が待ち構えていようとも、人間が全知全能の神でない以上、必ずや隙が生じるはずだ。その隙を見い出し、突くことに、玲奈は全神経を集中する決意を固め、いまは大人しく従う道を選ぶことにした。

エレベーターの中に奇妙な沈黙が流れた十数秒後、エレベーターは最上階に到着した。

エレベーターのドアが開くと、数歩の距離を置いて、また扉があった。赤と金の色を基調とした豪華な扉で、かつては商社社長が執務室として使っていた部屋であり、現在は教祖妖一郎が呪術をおこなう際に使用する専用の「儀式の間」となっている場所だ。

扉の前に立った蝦夷が、緊張した様子で静かに息を吐いた。その直後だった。

「入っていいよ、開いてるから」

扉の向こう側から声がした。幼い、少年のような声が。

「はッ。失礼します！」

緊張した面持ちのまま、蝦夷が扉を開けた。

ギギギイ、と軋んだ音がして、「地獄」の扉が開けられた……。

……扉が開いた向こう側には、蠟燭の明かりだけが灯された薄暗い空間が広がっていた。外からの光が一切遮断されているためか、まるで無限に広がる暗黒界のように闇が果てしなく広がっているようにすら感じられる場所だった。その中には、生暖かい、死んだ空気が滞留していて、その空気が開け放たれた扉から風となつて外に出た時、玲奈の背筋がゾツと寒くなった。

「……！」

触れてはならないモノに触れたような気がして、玲奈思わず唾を飲み込んだ。そして、彼女は部屋の中を凝視した。

部屋の中心にはぼんやりと光輝く輪郭で奇妙な紋様の法陣が描かれており、その中心にある「目」の模様の上に、ひとりの少年が胡坐をかいて座っていた。

その少年が、玲奈に向かってニコツと笑いかけてきた。

「やあ、よく来たね。待っていたよ」

それから、少年は玲奈を連行して来た蝦夷に語りかけた。

「縄を解いて彼女を自由にしておいてあげてくれ。もちろん、猿轡も呪札も取っていいよ」

「はッ。しかし、危険ではありませんか？ この女、教祖様に危害を成す恐れがあります……」

それを聞いて、少年がまたニコツと笑った。

「大丈夫だよ。対処できるから」

あっけら感とした口調でいう。

それを聞いて蝦夷は低頭した。

「はッ、わかりました。すぐに」

かくして玲奈は縄を解かれ、猿轡も外されて自由の身となった。

「じゃあ蝦夷、君は下がっていきな。後のことは気にしなくていいから」

「はッ、わかりました。失礼します」

機械的な動作で再び低頭した蝦夷は、室外へと退出し、扉を閉めた。ギギギイ、と錆びついた軋んだ音がして、扉が閉ざされた。

地獄が、再び薄暗い世界へと変貌を遂げ、残された男女が視線を交わし合った。

一方は敵意と警戒に満ちた視線を送り、他方はそれを受ける形で柔軟な視線

を送っている。

奇妙な沈黙が流れた。

その沈黙を、先に破ったのは少年の方であった。

「まずは挨拶をしようか。ボクの名前は邪妖院妖一郎。この教団の教祖を務めている者さ。以後、お見知りおきを」

それを聞いて、玲奈が大きく目を見開いた。

驚きが、顔に翼を広げているようだ。

「意外だったかな、ボクみたいな子どもが教祖だと聞いて？ ん？」

「……ああ。もっと老獪な人物を想像しておったからな。意外じゃった」

「まあ、そうだよね。ところで、君幾つ？ 九条家の巫女長は若いって聞いていたんだけど……もしかして、見た目若作りしてるだけで、かなりの高齢者？」

かなり失礼なこの問いかけに、玲奈の顔が思わず赤くなった。

「な、なッ、そんなわけあるか！ 我はまだ一×歳じゃ！ こう見えて、まだ

J〇じゃ！」

かなりムキになって否定するのは、その喋り方と乳房の大きさから、いつもかなり年上と勘違いされているからである。一度や二度ならいざ知らず、何度も繰り返されると腹も立つ。

一方、妖一郎の方は、それを聞いてホッと胸を撫でおろした。

「そっかー、それは良かった。もし、年齢が高かったらどうしようと思ったよ。ほら、君、ずいぶんと大人びた感じがするし、かなり古風な口調で喋るからさ。でも、ま、一×歳なら、気力もしっかりあるだろうから、これからすることにきつと耐えられるよね。うん」

無邪気な笑みを浮かべながら、ひとりで納得したように頷く妖一郎。

それを見て、怪訝な顔つきで玲奈が問いかけた。

「……………いったい、我に何をするつもりじゃ？」

妖一郎がニタリと笑った。

「酷いこと」

妖一郎がそう言った瞬間、室内の空気がドロリと歪み、重みを持った。

「……………！」

それに気づいて、玲奈はとっさに戦う構えをとった。拘束が解かれていて幸いだと彼女は思ったかも知れない。しかし、攻撃するための印を結んだところで、術が練れないことに気づいて戸惑いをみせた。

「な、なぜじゃ？ 術が練れん……………！」

「ああ、そうだ。言い忘れてたけど……………」

困惑する玲奈に嘲りの笑みを向けながら、妖一郎が無情な事実を静かに告げた。

「この部屋には魔封じの結界が張つてある。よつて、靈力による抵抗は無理だ。抗うなら、自分の肉体を頼りに戦うことだね。まあ、できればだけど」

そう笑つて言っている最中、妖一郎の身体に変化が生じた。

腕にあたる部分が溶けるように崩れ、赤茶色の粘液状の流動体となつて床に広がつたのだ。いや、腕だけではない。足の部分も同様で、濁つた赤茶色の流動体になるや否や、粘菌のように溶け腐つた肉が、形を変えながら、その質と量を、面積を、床一面に、あるいは高さを持つて室内を覆い尽くす勢いで、どんどんと広がりを見せていったのである。

「な、な、な——ッ！」

異質で異様なその光景を目の当たりにして、玲奈は思わず後ずさつた。

「な、なんじゃ、お主、その身体はッ！ お、お主、人間ではないのか……ッ！」

うわづつた声で、そう問うのも無理はない。目の前で変貌を続ける妖一郎の身体は、先ほどまでの少年体からは想像できないほど巨大に、そしておぞましいほど醜悪な肉の流動体へと変貌を遂げたのだ。しかもその濁つた茶色の流動体の至るところから、醜悪な形をした大小様々な触手や触腕が生えていて、まるで踊るようにウネウネと蠢いているのである。繰り返しになるが、とてもほんの少し前まで人の形をしていたとは考えられない変貌ぶりだった。にも関わ

らず、顔の部分だけはいささかも変化しておらず、肉塊の海を漂うようにして、右へ左へ、上へ下へと、ふかふかと浮かぶように揺れ動いていた。

その顔が、驚く玲奈に視線を向けた。

「人間だよ、ボクは」

そう言つて妖一郎がニコリと笑つた。

「神を取り込み、人の形を失つて、古いも病も無い魔神と化しても、ボクはボクであり、悲しむべきことに、人間なのさ。君と同じ、いずれこの地上から消滅しなければならぬ罪業を背負つた罪深き人間のひとりなのさ。まあ、この成りでは信じられないだろうけどね」

それを聞いて、玲奈が吼えるように叫んだ。

「し、信じられるものか！ おまえの何処が人間じゃ！ 何処からどう見ても、醜い化け物じゃないかッ！」

「うん、その認識でいいよ。醜い化け物こそが、人間の本質なんだからね」

そう言いながら妖一郎は、粘菌のような巨大で醜悪な身体を脈動させて、ゆつくりと、ゆつくりと、酷く緩慢な動作で、それでいて確実に玲奈との距離を詰めはじめた。

「ひッ——！」

そのあまりにも悪夢めいた光景に、玲奈は思わず一步、二歩と後ずさつた。

職業柄、醜悪な姿形をした魑魅魍魎の化け物は見慣れているはずなのに、彼女はじりじりと距離を詰めてくる妖一郎に気圧されて、まるで新人の退魔巫女のように、うろたえ、狼狽しながら、背中が壁にぶつかるまで後退してしまった。

「ち、近づくなッ！　こ、これ以上、我に近づけば、ただでは済まさんぞ！　か、必ず、絶対にッ、この世から消滅させてやるッ！　ぜ、絶対じゃぞッ！」

必死に強きに振る舞う玲奈だが、その身体は生まれたての小鹿のように小刻みに震えており、歯がカチカチと音を立てていた。力が使えないという状況と相まって、彼女がこの状況に恐怖しているのは明白だった。

それを見て、妖一郎がニタリと笑った。それは、この世の邪悪を凝縮したような、悪意に満ちた笑みであった。

「いいね、その威勢。実にいいよ。じゃあ、これからさっそく酷いことを始めるから、それが嫌だったらありったけの力で抗ってご覧。その方がボクも愉しめるし、何より良質な「苦しみ」を得ることが出来るからね」

そう言うなり、濁った赤茶色の粘液状態の肉がうねり、玲奈の手足に絡みついた。熱の無い、ひんやりとした冷たい感触が、表皮を透過して、玲奈の身体の内側へと入ってきた。ゾゾツと背筋が寒くなり、玲奈の表情が如実に青ざめた。

「ひ、ひいッ！　は、はは離せッ、わ、我にいったい、なにをするつもりじゃ

ッ！」

「だから、酷いことだつてば」

そう告げるなり、粘液状の肉を玲奈の四肢に絡みつかせた。そして、力を込めた。四股が軋む音がした。

ギシ、ギシ、メキ……ッ！

「ぐうッ、ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああッッッ！」

手足の骨が折れるのではないかと思えるほどの恐ろしい力が加わって、玲奈の口から絶叫がほとぼしる。口が大きく開け拡がって、その端から涎が滴り落ちた。

それを見て、妖一郎が苦笑した。

「大げさだなあ。ちよっと力を込めただけじゃないか。こんなことで悲鳴をあげているんじゃない、これから先が思いやられるな」

そう言いながら、触手を使って玲奈の着衣をすりと脱がす。上半身が裸になって、人の顔よりも大きな乳房がボロッとこぼれ落ちた。白く、柔らかく、それでいて張りがあり、薄っすらと青い血管が浮かび上がっている奇妙で美しい果実のような乳房がだ。薄いピンク色の乳首がツンと立っているのは、おそらく恐怖と緊張のためであろう。



「うん、立派な乳房だ。とつても大きいね。これは弄りがいいがそうだ」
そう言いながら、たわわに実った白い乳房を、触手や触腕を使って撫でまわし、揉みしだく。それに伴って、玲奈の背筋に微弱な電流のような感覚がゾク

匂いを嗅ぎながら、妖一郎が顔に笑みを浮かべながら触手を動かし、特殊な模様を玲奈の腹部に焼き刻んでゆく。

ジュツ、ジュウツ、ジュジュ、ジュウウウウウウ……。

という肉が焼ける音を立てながら。

続きは本編でお愉しみてください。